

京の町家が語るくらしの技

ワザ

この街に住み続けたい！ — 三人の建築家からの提案 —

暮らし方研究会

奈良女子大学 生活環境学部
教授 吉村 篤一

古都の町家の現状

京都は戦災を受けなかったこともあり、神社・仏閣以外にも多くの木造建築が残っています。特に一般市民の住まいである町家が多く残されていることはよく知られており、十数年前から町家を保存しようという運動が広がってきました。

しかしながら、バブルの頃には多くの町家が壊され、マンションやプレハブ住宅或るいは木質アパートなどに建て代わつてしまいました。けれどもまだ三万軒くらいは以前の面影をとどめているものが残っているとわかっており、戦前からずっと住み続けている人が多く、これからも住み続けていきたいと思つている人も多いようです。

また、いわゆるドーナツ化現象で郊外に出てしまつていた人達が戻つてきて、都心に住もうとしている人も徐々に増えてきているようです。これは「都市の魅力」ということがだんだん分かつてきたからではないかと思われまふ。もともと、近世の都市、京・大坂・江戸などの街は、それぞれの家は通常生業を持つており、日常の買い物や娯楽或いはレクリエーションなどにも非常に便利にできていました。いわゆる職住混淆の街だったのです。そのかわり、狭小な敷地に工夫して住みやすい方

法を考えていたわけです。

そういった伝統が残されているのが、今では京都の町家だけになつてしまいました。ですから、現在ある町家はできるだけ残すように努力するともに、新しく造る住まいも、そういった伝統ある町家の空間的なよさを生かしたものにしなければならぬし、街づく

りとしても近世の町の仕組みを学ぶ必要があると思います。

先人の知恵を生かす

京都の町家は周知のように、間口が狭く奥行き長い狭小な敷地に建つているものが多く、そういった敷地に快適に住むための知恵として、「坪庭」が

生まれました。

また土間になつている通り庭なども当時の生活の知恵から生まれてきたものであり、狭い敷地でも快適に過ごせる空間が可能になつたわけです。そのために風がよく通り、暑い夏も比較的過ごし易く、また四季の変化の感じられる住空間が得られたわけです。

これからの新しい住まいを都心に求めるときは、こういった町家の空間的な特徴を生かす必要があるでしょう。ただし町家の形をそのまま踏襲するのではなく、町家の空間的な構造をよく理解して、現代生活のニーズに対応できるように考えることが必要です。最近見直されている「二世帯住宅など」にする場合は、二階建てにして、立体的に空間を利用することも考えられます。

また木造の三階建ても可能になり、部心でも増加しつつあります。申請には構造計算書が必要であることもあり、構造的にも安心でき、比較的ローコストで建築できるので、狭小敷地に建てる場合の空間利用の方法として、積極的に採用すればよいのではないのでしょうか。

周囲の景観へ配慮を

ところで、住まいだけではなく建物をつくることにより、道路に対して町

並みが形成されることになります。先述の近世の町では、ほとんどの建築が「階建てで瓦葺きの屋根で軒があり、それぞれの町特有の格子などがあつて、美しい町並みを形成していました。けれども現代は価値観の多様化が一般化し、工法技術の多様性や新建材の氾濫などにより、以前のようによく似た形の建築が並ぶことによつて町並みがさうろう、ということも期待できなくなつてきました。こういった状況のなかで、町並みを考えるということは大変難しいことですが、通りの特徴を考慮して一定のルールを決める

PROFILE

- 1940年 京都生まれ。
 - 1963年 京都工芸繊維大学工学部建築学科卒業
坂倉準三建築研究所入所
建築環境研究所開設
 - 1975年 建築環境研究所開設
 - 1998年 奈良女子大学生活環境学部教授
- 主な作品 東九条の家、花欄閣、小坂の家、大龍堂書店、兵庫県立赤穂高校、JR西日本花園駅及駅前広場他多数
- 主な著書 「京の町家考」「地模様としての建築」等



吉村 篤一
(よしむら といち)

風情「坪庭」が息づく

